

大学図書館の学外者向けウェブページについて

美作大学教務課 二宮 敦

1. はじめに

本研究では、全国の大学図書館のウェブページのうち、学外者向けのウェブページ（主に図書館の利用案内を目的としたページ。以下同じ）について概観し、その傾向の分析と、いくつかの提言を行った。

本研究の具体的な調査方法として、東京工業大学附属図書館が公開している「全国大学図書館」リンク集（注1）に掲載された638図書館のウェブページを閲覧し、学外者向けのウェブページを一つずつ確認・調査した。各図書館ウェブページの調査開始日は2022年12月6日、調査終了日は2022年12月10日である。本稿が掲載される予定の『私立大学図書館協会会報』第162号は2024年9月発行予定であり、調査から2年近くタイムラグがあることをご容赦いただきたい。

調査対象となった638館のうち、学外者向けとして明確に区分されたウェブページ（注2）が存在しているのが473館であり、全体の74.1%にあたる。残りの165館（25.9%）は、学内者向けと学外者向けの情報が分かれることなく混在しているケースや、学外者には図書館を開放していないため、そもそも学外者向けのウェブページが存在していないケースや、従来学外者向けのウェブページが公開されていたようだが、コロナ禍にあって学外者向けのウェブページを閉鎖しているケースなどがあった。さらに、ごくわずかだが、記載されているのが学内者向けの情報なのか、学外者向

けの情報なのか、学内者・学外者向け共通の情報なのかを判別できないウェブページも存在した。

なお、2022年12月の時点では、感染症（COVID-19）対策として多くの大学図書館で学外者の利用が制限されていた。この利用制限の告知方法として、制限以前の状態のままと思われるウェブページの冒頭などに、赤字など目立つフォントで「感染症対策のため現在は利用できません（利用を制限しています）」等のメッセージを追記して、公開し続けている館が大半であった。それ以外の事例としては、学外者向けのウェブページ全体（あるいは説明部分のみ）を取り消し線で消し、文章は読解可能だが、明らかにサービス停止中だと分かる状態で公開している館や、学外者向けのウェブページを閉鎖している館などが、それぞれ数館ずつ見受けられた。

本研究では、学外者向けとして明確に区分されたウェブページが存在していた473館について調査したが、個人で確認を行ったため、調査時に見落としや誤読があった可能性は否定できない。また、各館のサービス内容や、ウェブページの記述は変わることがあるため、全体的な傾向を分析する観点からは問題ないと考えているが、厳密な数字とは誤差があり得ることをご了承いただきたい（注3）。

2. 主要サービス項目の記載状況

学外者向けとして明確に区分されたウェブページが存在していた473館について、筆者が主要な項目だと考えた11項目の記載の有無を確認した。11項目すべてが「主要な項目」だと言えるかどうか、また、他にも入れるべき項目（例えば「視聴覚資料の利用」など）があるのではないかという異論もあると思われるが、ともあれ、結果は表1の通りである。

表1. 学外者向けウェブページにおける
各項目の記載館数と割合

n=473	
項目	記載館数 (%)
館外貸出	422館 (89.2%)
コピー	335館 (70.8%)
PC・インターネット	117館 (24.7%)
レファレンス	91館 (19.2%)
データベース	87館 (18.4%)
予約	84館 (17.8%)
自習・席貸し	75館 (15.9%)
電子ジャーナル	57館 (12.1%)
リクエスト	34館 (7.2%)
Wi-Fi	25館 (5.3%)
印刷	22館 (4.7%)

繰り返すが、これはあくまで「記載の有無」の調査である。学外者向けウェブページに「本学図書館は館外貸出できます」と書いてあったとしても、「本学図書館は館外貸出できません」と書いてあったとしても、いずれも「館外貸出:記載あり」とカウントしている。それに対して、「本学図書館では『閲覧』と『複写』が可能です」などの表現に留まっていた場合、「館外貸出」については「記載がないためにサービス不可である」と判断はできるものの、この調査では「記載なし」とカウ

トした。

表1を見てみると、「館外貸出」が「422館(89.2%)」という数値だが、これは、422館に含まれなかった51館(10.8%)では「本学図書館では『閲覧』と『複写』が可能です」など、「館外貸出」には触れない表現に留まっていたことを意味する。

本研究では、大学図書館がどれだけ学外者に開放しているかという視点は二の次として、大学図書館から学外者へ向けてのウェブページでの情報公開について、サービス実施の有無を問わず、どの程度明示されているのかを調査した。

なお、断っておくが、「学外者が想定しうるすべての図書館サービスについて、学外者向けウェブページで利用可否を明示するべき」だと主張したい訳ではない。各館の環境や規模、想定される利用者層や来館者数・来館頻度などによって、記載すべき項目は変わってくるはずである。

しかし、現状では「館外貸出」と「コピー」の記載がそれぞれ全体の89.2%、70.8%に達しているのに対し、「PC・インターネット」が24.7%、それ以外の項目に至っては軒並み20%未満しか記載されていない。インターネットを利用した情報検索や、BYOD (Bring Your Own Device) が叫ばれて久しい現代の大学図書館のウェブページとしては、学外者に向けての情報提供が不足していると感じざるを得ない。

3. 記載項目の候補

前項では学外者向けウェブページ記載項目のうち11項目の現状を取り上げたが、それ以外にも、記載を検討すべき項目は数多く存在する。いくつかの大学図書館が記載していた項目や、公共図書館・専門図書館などのウェブページで記載されている項目を調査し、学外者向けウェブページの構成を考えるにあたって、記載を検討すべき項目の候補を表2に挙げる。

表2. 学外者向けウェブページ記載項目候補

カテゴリ	項目名
リード文	リード文 (導入文)
施設・設備	アクセス・所在地、駐車場・駐輪場、入館ゲート (入館方法)、手荷物ロッカー、飲食スペース、自動販売機、ゴミ箱、多目的トイレ、車椅子対応設備、読書拡大機
蔵書・資料	蔵書 (コレクション) 構成、電子ブック、電子ジャーナル、データベース、視聴覚資料、点字資料、大活字資料、DAISY 資料、学位・修士・博士論文、大学刊行物 (卒業アルバム)、貴重資料、郷土資料
利用登録	登録条件、身分証明書の条件、登録料と支払方法、紹介状必要有無、アポイントメント必要有無、利用証忘れ対応、利用証紛失対応、利用規程 (PDF)
館外貸出	館外貸出、リクエスト、予約、延長、長期貸出、延滞ペナルティ、弁償、郵送サービス、返却ポスト
サービス	利用案内 (PDF)、レファレンス、マイライブラリ、パスファインダー、コピー (著作権法第 31 条解説)、FAX、スキャナ、領収書発行
利用ルール	自習 (席貸し)、飲食、会話、パソコン持込利用、スマートフォン利用、喫煙、両替、児童・乳幼児入館、盲導犬
PC 機器等	備付パソコン、有線 LAN、Wi-Fi、プリンタ (3D プリンタ)、充電コンセント
その他	寄贈受入、見学受入、Q&A (よくある質問)、窓口・連絡先

それぞれのカテゴリと内容について、いくつか説明を加える。

「リード文」

「6. リード文 (導入文) のススメ」で詳述する。

「施設・設備」

アクセスや館内設備についての説明。主として公共交通機関での来館を想定するのか、車や自転車での来館を想定するのかで記述内容が変わってくる。車の場合、大学ウェブページのアクセス案内へリンクして終わりではなく、大学図書館を利用する場合の駐車スペースはどこまで説明するのが望ましい(「大学の外来者用駐車場=大学図書館利用者の駐車場」という大学の場合も、利用者によっては、大学図書館利用者専用の駐車スペースがあるかも知れないと考える可能性を考慮すべき)。また、図書館の入館ゲートを通るという行為も、初めての来館者にとっては不安が大きい部分である。写真での紹介を加えている館や、動画で紹介している館も見受けられた。

さらに、車椅子の方や身体障害者の方の利用も想定した、施設・設備に関する情報提供も考えたい。

「蔵書・資料」

そもそも、(一部の例外を除き) 大学図書館ではその大学の教育分野に沿った蔵書構築を行っているということを学外者に理解していただく必要がある。

また、各館の特徴となるコレクション、貴重書、郷土資料などがあれば、それらについても言及するのが望ましい。学位・修士・博士論文、大学刊行物や過去の卒業アルバムなどの利用希望もあるはずであり、その頻度によっては利用の可否情報を掲載する必要があるかも知れない。

「利用登録」

閲覧や、館外貸出を行うにあたって利用登録が必要な館は、登録可能な条件(居住地、年齢など)や、登録に必要な持参物などの情報を提供する必要がある。利用に関する規程をPDFファイルなどで公開している館もいくつか見受けられた。

「館外貸出」

館外貸出を行っている館では、貸出に付随する、リクエスト、予約、延長、返却ポスト利用などのサービスを期待されることもある。実施しているサービスの明記はもちろんだが、実施していないサービスであっても、ニーズが高いサービスがあれば「〇〇サービスは行っていません(行ってない特記理由があれば理由を併記しても良い)」という情報発信が必要であろう。

「サービス」

冊子体の利用案内のPDFデータを公開している館もいくつか見受けられた。特に長岡技術科学大学附属図書館の利用案内冊子(注4)は情報が良く整理されていて見やすいと感じた。

レファレンスサービスやFAXの利用などを期待されることもある。「館外貸出」と同じく、実施しているサービスの明記はもちろんだが、実施していないサービスであっても、ニーズが高いサービスがあれば「〇〇サービスは行っていません(行ってない特記理由があれば理由を併記しても良い)」という情報発信が必要であろう。

「利用ルール」

飲食、会話など、学外者の来館後に説明してもある程度間に合うルールもあれば、自習場所としての閲覧席の利用、乳幼児連れでの来館など、来館後に説明されたのでは利用者が困る情報もある。後者については特に、ウェブページで明示しておくべきであろう。

「PC 機器等」

インターネットを利用した情報検索や、BYOD(Bring Your Own Device)が叫ばれて久しい現代、学外からの利用者についても、大学図書館の資料と、自身のパソコンやデバイスなどを併用して調査・学習したいというニーズが高まっているのは想像に難くない。今回の調査では、学外者にゲストWi-Fiを提供できると明示している館、プリンタでの印刷が可能だと明示している館、館内電源を利用可能だと明示している館が見受けられたが、いずれも数館に留まっていた。あえて評価したいのは、これらのサービスを提供していない館のうち、サービス不可である旨を明示していた館である。自館のPRにならない情報発信ではあるが、利用者のニーズを捉え、現時点では対応できない旨を明示する姿勢は見習いたいと感じた。

「その他」

大学図書館に自宅の蔵書や個人が出版した図書を寄贈し、役立ててもらいたいという要望も少なくない。(一定の条件下で)受け入れる場合はもちろん、一貫して受け入れない場合であっても、自館のスタンスを表明しておいて良いのではないだろうか。建築的特徴がある館や、映画やドラマのロケなどに使用され、いわゆる「聖地」扱われている館などは、見学者に対する情報発信も必要かも知れない。

これらのうち、どの項目を記載し、どの項目を記載しないかは各館の環境や規模、想定される利用者層や来館者数・来館頻度などに合わせて選択するべきで、すべての図書館に当てはまる正解はないと考える。「2. 主要サービス項目の記載状況」で触れた通り、「館外貸出」を行わない大学図書館にとっては、「本学図書館では『閲覧』と『複写』が可能です」というような表現をするのは自然なことかも知れない。しかし、学外利用者にとって、大学図書館のサービスの全容が把握できない以上、

非実施のサービスについて、何かできないかが明示されている方が、より親切ではないだろうか。仮に「過去に問い合わせがなかったからウェブページに記載しなくて良い」と考えている館があるとしたら、「そもそもそのサービスの存在が学外者に知られていなかったのも、問い合わせがなかった」という可能性にも目を向けるべきであろう。各館が実施しているサービスに言及するのは当たり前だが、各館で非実施のサービスについてどの程度言及するかについては、想定される学外者の（潜在的なニーズを含めた）ニーズに沿って考えなければならない。

なお、記載項目の記載場所について、学外者向けウェブページのうち、メインページには主要な情報のみの記載に留め、活用頻度が少なそうな情報は下層のページや Q&A（よくある質問）にまとめることも考えたい。さらに、Q&A（よくある質問）の続きとして、疑問が解決しなかった際の問い合わせ窓口を併記すると、より望ましいだろう。

4. 学外者向けウェブページの深度

大学図書館のウェブサイトのトップページを深度0とし、学外者向けウェブページにたどり着くまでに、何階層潜らなければならないか（クリックしてページ遷移しなければならないか）を計測した（注5）。結果は表3の通りである。

表3. 学外者向けウェブページの深度

n=473		
深度	館数	(%)
0	9 館	(1.9%)
1	381 館	(80.5%)
2	80 館	(16.9%)
3	3 館	(0.6%)

多くの学外者にとって、学内者のみが享受できるサービスにはあまり関心がないはずであり、自分自身の利用について知りたい場合、学内者向けウェブページの情報にはノイズですらある。

初見であっても学外者向けのウェブページを見つけやすいように、ほとんどすべての大学図書館で、トップページに学外者向けウェブページへのリンクがあり、1階層下(80.5%)や2階層下(16.9%)など、浅い深度に学外者向けウェブページが配置されていた。さらに、このリンクの名称についても「学外の方へ」「〇〇市民の利用について」など、一見して判別しやすい名称が使用されているケースばかりであり、非常に望ましい状態だと感じた。

5. 学外者向けウェブページの言葉遣い

2017年の拙研究発表（注6）でも述べたが、大学図書館で使われる用語は、利用者にとって理解しづらい用語が多い。今回の調査でも、「OPAC」「レファレンス」「パスファインダー」「ラーニングコミュニティ」「禁帯出」「(「書庫から資料を取り出す」という補足説明なしでの) 出納」など、明らかに図書館関係者以外にとって不親切な用語が学外者向けウェブページに使われているケースが散見された。これらは早急に改善すべきだが、それだけでなく、「館外貸出」「閲覧」「書架」など、一見平易で、図書館業務で長年にわたって使われ続けている言葉の中にも、改善すべき言葉がいくつかあると考える。

例えば「館外貸出」という用語について、今回の調査で非常に多くの大学図書館のウェブページで使用されていたが、例えば「貸出」や「レンタル」という用語に比べると一般的な利用頻度は低いのではないだろうか。「館内貸出」に対して「館外貸出」と区分して説明する必要があり、ウェブページでもそう言及しているのならまだしも、理由なく「館外貸出」という用語を使い続けるのは賛成できかねる。

「閲覧」「書架」などの用語についても、本当にこの用語で学外者に通じるのか、他の用語、例えば「(資料の)館内利用」「本棚」という平易な表現では不都合があるのか検討する必要があるだろう。「図書館界で従来使われてきたから」という理由は利用者には関係がなく、再考を促したい。特に、学外者向けウェブページは、学内者向けウェブページよりも多様で、自館や図書館そのものに不慣れな利用者を想定して文章や用語を選ぶ必要があると考える。

また、用語の使い方ではないが、サービスの説明として「原則として」を連呼しているウェブページなどもある。例外的な対応をせざるを得ない場合があるため、いわば「免責」として書いているのであろう内情は推察できるものの、別の方法で例外・免責に関する説明を加えるのが望ましいだろう。

さらに、重箱の隅をつつくようで恐縮ではあるが、某大学図書館の学外者向けウェブページでは、利用者の条件について「利用者の年齢・居住地について、〇〇大学附属図書館では特に厳しく制限はしておりません」と記載されていた(注7)。この表現によって、「大学図書館は厳しく利用者の条件を制限するのが一般的だが、本学の図書館はそこまで厳しく制限はしない」と捉えられかねない文章になってしまっているのではないだろうか。

残念ながら、単純な誤字・脱字が残っているウェブページもあり、ウェブページの言葉遣いにはより一層の配慮が必要だと、自戒を込めて考えている。

6. リード文(導入文)のススメ

学外者向けウェブページのリード文(導入文)は、いかなる理念・根拠に基づき、何を目的として学外者に大学図書館を開放するのか立場を表明する場であり、時として、どういう理由で学外者の利用を制限するのか理解を呼びかける場でもあ

る。

今回の調査で最も驚いたのが、このリード文を配している館の少なさである。学外者向けとして明確に区分されたウェブページがあった473館のうち、リード文を配しているのは35館(7.4%)であった。

リード文はウェブページの冒頭にあるため、長々と読ませるといふより、簡潔に要点をまとめている館が多い。リード文の文章量を見てみると、35館中21館(60.0%)が100文字以内にまとめており、35館中32館(91.4%)が200文字以内にまとめている。ちなみに筆者が所属していた美作大学図書館のウェブページにあるリード文(注8)は以下の文章で175文字だが、これでも国内の大学図書館ではトップクラスに長文であることが、今回の調査で判明した。

学校法人美作学園の創立100周年を記念し、2016年2月26日に「美作学園創立100周年記念館」がグランドオープンしました。

約400人を収容する100周年ホール、情報教育支援施設、図書館からなる記念館は、美作大学・美作大学短期大学部の学生、教職員の学修・研究に寄与するのみならず、地域住民の方々に広く公開し、岡山県北の「知の拠点」として屹立します。

さて、「いかなる理念・根拠に基づき、何を目的として学外者に大学図書館を開放するのか」という部分を見てみると、「地域貢献」「地域開放」「地域還元」「開かれた大学」「生涯学習」「文化向上」「文化発展」などのフレーズが並ぶ。一方で、目標や理念を語らず、「〇〇大学図書館は地域の皆様に開放しています」と、開放している事実だけを述べている館もいくつか見受けられた。

なお、リード文からは少し逸れるが、北陸先端科学技術大学院大学附属図書館のウェブページでは、「附属図書館長からのメッセージ」として、自

館のPRがいくつか語られており、「地域の皆様のご来館ご利用を心よりお待ちしております」と記されている（注9）。リード文で「〇〇大学図書館長より」「〇〇大学図書館一同より」など、発信主体を明言している館がほとんど見受けられない中、発信者を明らかにすることで、よりメッセージが効果的に伝わると感じた。

実際の研究発表の場では筆者が心惹かれた10館のリード文を紹介した。本稿ではスペースの関係で、特に優れていると感じる2館のリード文を紹介させていただく。

まずは福井工業大学図書館のリード文（注10）。

本学は、地域社会に開かれた大学を目指しており、図書館も広く一般に開放しています。

一般の方々の生涯学習や研究者や企業の方々の学術・技術情報の取得等々に、どうぞご利用下さい。

けれんみのないリード文だが、特に、自らの大学を「地域社会に開かれた大学」だと標榜するのではなく、「地域社会に開かれた大学を目指しており」と、目標に向けて邁進している大学だと述べている点に注目したい。また、「どうぞご利用ください」という丁寧な表現もあいまって、学外者にとっても訪問しやすい大学ならびに大学図書館だという印象を受ける。少々古い価値観になるのかも知れないが、学外者にとっては大学図書館を訪ねるといのは心理的ハードルがまだまだ高いのではないかと感じている。他の館を見渡しても、いかにも敷居が高いと感じさせるようなリード文はなかったものの、訪問前にこのような丁寧かつ謙虚なリード文を読めば、より気軽に訪問することができるのではないだろうか。

続いて、千葉科学大学図書館のリード文（注11）。

本学は2004年の開学以来、図書館を学外のみならずみなさま方にも開放してまいりました。そしてこ

れからも本学図書館は、千葉科学大学を支援してくださる銚子市をはじめとする近隣地域のみならずみなさま方にとっての、生涯学習や情報の拠点でありたいと思っています。皆様の多数のご利用をお待ちしております。

「地域住民に支援されて開学した」「だからこそこれからも地域住民の皆様に還元したい」というストーリーが伝わってくるリード文。

地域立の大学の図書館は、ぜひこのようなメッセージを自館のウェブページのリード文に織り込むべきだと考える。

福井工業大学図書館のように低姿勢かつ丁寧なリード文もあれば、千葉科学大学図書館のように、「地域立を語る」「歴史を語る」ことでストーリー性を強めているリード文もある。他にも、蔵書構成・コレクションを紹介して利用を促すリード文などもあり、短い文章の中にも、各館の個性や工夫を感じた。

大学図書館本来の利用主体である学内者（学生・教職員）に対しては、自館の立場を表明する機会が多く、ウェブページの冒頭にリード文がなくても良いのかも知れない。しかし、学内者と異なり、学外者に対して自館の立場を表明できる場は本当に限られている。「地域貢献の一環として、大学図書館を住民に開放しております。ぜひご利用ください」といったシンプルな文章だけでも良い。また、もしコロナ禍での利用制限に関する注記がウェブページの冒頭に残っているのであれば、注記を外す時が好機だともいえる。ぜひ、1館でも多くの館でリード文を導入するべきであろう。

7. 注意喚起雑感

学外者向けウェブページを見て回っていると、一般的な利用に関する注意事項（例えば「館内では貴重品は身に付けてください」など）に紛れて、具体的な注意喚起が混在していることに気づかさ

れる。いくつか例を挙げてみる。

- ・高校生の方は、原則、制服着用とします
- ・本学学生以外の学生利用も可能ですが、一度に大人数で来館される場合は、事前にご連絡ください
- ・学内には各所に防犯カメラを配備していることをご承知おきください
- ・カメラなどで館内の撮影はしないでください
- ・データベースの利用（ご自分で操作できる方に限ります）

具体的な注意喚起は、その背景に具体的なトラブルがあったのだろうか、と想像してしまう。まさに「通り抜け無用で通り抜けが知れ」である。

また、問題行動を起こす利用者の対応に、各館苦心しているのではないかとと思われる注意喚起も散見される。

- ・館内では許可なく印刷物等の配布、勧誘など行わないでください。
- ・在学生との交流はご遠慮ください

これらのウェブページでの注意喚起は、トラブルを抑止する効果はさほど期待できないかも知れない。抑止よりもむしろ、「大学図書館は真剣に学習・研究する場所であり、そこには真面目で善良な来館者しかいない」というように、過度に大学図書館および来館者を信頼している学外者への注意喚起・被害抑止という側面が強いのではないだろうか。

8. おわりに

最後に、構成や説明が優れていると感じた学外者向けウェブページを2例紹介したい。

1 例目は、東京医科歯科大学図書館のウェブページ（注 12）。重要な部分は写真や文章を多く使

って説明している反面、重要度が低い部分は一言触れるだけに留めるなど、メリハリの利かせ方が素晴らしく、「無線 LAN、館内設置 PC（蔵書検索専用機を除く）、コンセントは利用できません」という、他館ではあまり触れない部分についてもしっかりと赤字で明記している点も素晴らしいと感じた。

2 例目は、愛媛県立医療技術大学図書館のウェブページ（注 13）。貸出資料の宅配サービスなど、学外者であっても利用可能なサービスが多く、それらのサービスについて写真を多く使って説明しており、利用者にとって受けられるサービスをイメージしやすいデザインのウェブページだと感じた。

本研究では473館の大学図書館の学外者向けウェブページを閲覧し、この2館以外にも素晴らしいウェブページを多く発見することができた。また、ウェブページ全体ではなく「このウェブページのこの部分は素晴らしい」という部分も多くあったのだが、時間の関係で紹介しきれなかったのは残念である。

本研究のまとめとしては、繰り返し述べた「学外者向けウェブページの構成や表現は、各館の環境や規模、想定される利用者層や来館者数・来館頻度などに合わせて組み立てるべきで、すべての大学図書館に当てはまる正解はない」という点に尽きる。学内者向けのウェブページが、基本的に学内の教職員と学生を想定すれば良いのに対して、学外者は多様な利用者を想定しなければならないため、どういった利用者に向けてのウェブページにするのか、対象を絞りにくいのはやむを得ないことである。学外からの利用者には、図書館に対するリテラシーが高い利用者もいれば、低い利用者もいる。ICTに強い利用者もいれば、弱い利用者もいる。図書館に関するイメージを具体的に持っている利用者もいれば、不明瞭な利用者もいる。それらの利用者に対して、どこまで、どのように情報発信するのか、今後引き続き各館で検討し、

改善していく必要があるだろう。

さらに、ブログやレスポンスウェブデザイン（注14）などがそうであったように、新しい技術によって、学外者向けウェブページの構成や表現が変化し続けていくのは間違いないと言える。ウェブページを訪問した利用者に合わせて、最適化されたウェブページが自動生成され、表示される時代もそう速くはないであろう。あるいは、「ウェブページが（パソコンやタブレット端末の）モニターに表示される」という概念が過去のものになるのが先かも知れない。ともあれ、ウェブサイトを用いてサービスを提供・紹介し続けている我々は、この先もずっと、様々なWebサービスや新技術についての情報を収集し続けなければならないと考える。

アフターコロナにあって、多くの大学図書館で学外者向けサービスが見直されている。本研究発表が、各館での学外者向けウェブページの見直しの一助となれば幸甚である。

本研究は、2023年6月23日に開催された2023年度私立大学図書館協会西地区部会研究会（オンライン）で発表を行い、その後、発表に対する意見・質疑などを踏まえて、本稿にまとめ直しました。

ところで、沖縄出身の学生約100人（全学生の約10%）を擁する美作大学では、毎年6月23日の「慰霊の日」に学生・教職員が沖縄の方角に向かって黙祷を捧げ、亡くなった方々のご冥福を祈り、世界の平和を祈念しています。本研究会が、この日に開催されたのは偶然なのかも知れませんが、「慰霊の日」を知っていただくきっかけとなれば幸いです。発表の場でも一言触れさせていただきました。

末筆になりましたが、本研究を発表する場を与えていただいた、私立大学図書館協会の皆様に心より感謝申し上げます。

注

注 1 : 「全国大学図書館」(東京工業大学附属図書館公開)

https://www.libra.titech.ac.jp/about/libraries_index (参照 2022-12-10)

注 2 : 「明確に区分されたウェブページ」は、ページが独立しておらず、同一ページ内で(罫線・段落などで)区切られているものも含む

注 3 : 国内では、2023 年 5 月 8 日より COVID-19 の感染症法上の位置づけが 2 類感染症から 5 類感染症に変更となったため、これに合わせて多くの館で学外者向けのサービス内容やウェブページの記述が見直されている

注 4 : 「学外利用者のための図書館利用案内」(長岡技術科学大学附属図書館公開)

https://lib.nagaokaut.ac.jp/infomation/guide/user_files/baa13ccfdfd12d785f4d9595e0c3b4.pdf (参照 2022-12-10)

注 5 : 同一ページ内の移動は+1 とカウントせず、別ページに遷移した時のみ+1 とカウントした。また、学外者向けウェブページそのものが複数階層に分かれているウェブページも存在したが、学外者向けウェブページに到着するまでの深度のみを計測した

注 6 : 二宮敦, みなさん、ついで防災がオススメですよ., 私立大学図書館協会会報, 2018, 第 150 号, pp. 133-136.

研究発表は 2017 年、会報での発表報告は 2018 年

注 7 : 検索エンジンを用いての特定を避けるため、文意は損なわないようにしつつ、表現を改変した

注 8 : 「学外の方へ: 知の拠点」(美作大学図書館公開)

<https://mimasaka.jp/library/outside/knowledge> (参照 2022-12-10)

図書館が酒された「美作学園創立 100 周年記念館」全体についてのリード文(導入文)であることも、文字数が多くなっている一因である

注 9 : 「附属図書館長からのメッセージ」(北陸先端科学技術大学院大学附属図書館公開)

https://www.jaist.ac.jp/library/outline/message/index_i.html (参照 2022-12-10)

注 10 : 「学外の方への利用案内」(福井工業大学図書館公開)

<https://www.fukui-ut.ac.jp/library/guide/guest/> (参照 2022-12-10)

注 11 : 「学外利用者の方へ」(千葉科学大学図書館公開)

<https://www.lib.cis.ac.jp/drupal/ja/node/28> (参照 2022-12-10)

注 12 : 「利用案内(学外者・卒業生)」(東京医科歯科大学図書館)

https://www01s.ufinity.jp/tmdu_lib/?page_id=370 (参照 2022-12-10)

注 13 : 「学外の方へ: ご利用案内」(愛媛県立医療技術大学図書館公開)

<https://www.epu.ac.jp/library/gakugai/post-3.html> (参照 2022-12-10)

注 14 : PC、タブレット、スマートフォンなど、異なる画面幅のブラウザでウェブページを表示しても、見やすく最適な表示にする機能をいう